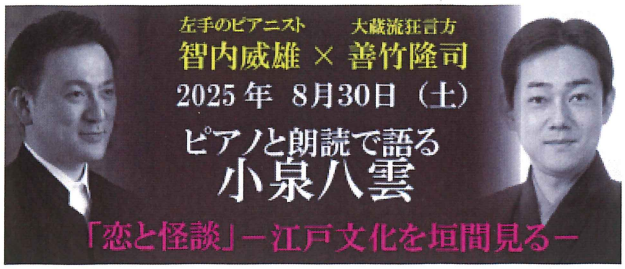

ピアノと朗読で綴る「小泉八雲の恋と怪談」

左手のピアニスト　　大蔵流狂言方

智内威雄　×　善竹隆司

令和７年８月 30 日（土）　　白鷹禄水苑　宮水ホール

1. 日本人作曲家による左手のピアノ演奏曲の紹介

左手のピアニスト、オープニングは智内威さんによるピアノ独奏で幕を開けます。

近藤浩平　　「声明とコラールの記憶」

諸橋玲子　　「あわひⅡ」

2. その深淵なる眼差しを通して江戸文化を垣間見る

江戸時代の日本人はいったいどんな心を持っていたのでしょう?

江戸文化が濃厚に息づいていた明治 23 年、憧れの日本にやってきた英国人、ラフカディオ・ハーン、後の小泉八雲は、ジャーナリストとしてのまなざしで人々の暮らしを見つめ、心の奥底に潜む、神秘に触れ、綴りました。そこには西洋文化の影響を受けていない無垢な日本人の姿が描写されています。切ないほどに純度が高く、奥ゆかしい好奇心を寄せてほほ笑み、礼儀正しい人々。激しく愛し、燃え尽きた男と女。

第一部の後半は、後に小泉八雲を名乗るこの風変わりな作家が、新鮮な驚きをもって記した、まだ江戸の習俗が残る町の様子を、ピアノと朗読でお聴きいただきました。

3. ピアノと朗読で語る小泉八雲の「怪談」

日本各地に伝わる伝説、幽霊話を、研ぎ澄まされた感性と独自の解釈で、情緒豊かな文学作品として蘇らせた小泉八雲。ノルドグレンは、その怪談集より、「恋情」をテーマにした不思議で謎めいた物語を取り上げ、時に繊細に、時に不気味に音に紡ぎあげ、左手のためのバラードとしました。後半は、いよいよ小泉八雲が描く人の恋情の切なさ、強さ、そして時にはグロテスクな心の世界を、智内威雄の演奏と、善竹隆司の朗読で綴ります。

古い六曲一双の屏風、衣桁に掛けられた大正時代の振袖、舞台に置かれた燭台。かつての芝居小屋のような、濃密な雰囲気を漂よわす「宮水ホール」。燭台に灯された和蝋燭の炎が揺らめき、背後の金屏風に映える中、静かに語り始める善竹さん。時には背筋が凍るような不気味さを湛え、にそして時には激しく、その変幻自在な表現の豊かさには、狂言で培われた声と間がいかんなく発揮されます。そこに流れるピアノの演奏とあいまって、ホール全体はただならぬ雰囲気に包まれ、観客は小泉八雲が作り上げた異世界に引きずり込まれたような感覚に陥ります。智内さん独自が築き上げた演奏スタイによる「左手のピアノ世界」は、ピアノという楽器の可能性も含め、私達に新鮮で深い感動を与えます。

最後は、能で一日の演能をめでたく舞いおさめる意味で、最後に添えられる短い謡、「祝言」を善竹さんに朗々と謡っていただき、ホール全体を浄めていただき、本公演は幕となりました。

公演後は、蔵出し限定酒、あるいはソフトドリンクを皆様にご提供し、お酒が大好きなお二人と交え、楽しい懇談のひと時をお過ごしいただきました。